
灰色の祓魔士

牧村沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の被魔士

【Nコード】

N5991W

【作者名】

牧村沙夜

【あらすじ】

？終末の日？以来、世界全土で人を超越した存在？悪魔？が跋扈するようになった世界。彼らに対抗しうる唯一の存在は、自らの魂を犠牲にして、彼らのチカラを部分的に獲得した？被魔士？だけである。その？被魔士？の一人であるクロウは、町に襲来した？悪魔？との小競り合いの後、謎の少女セツナと出会うが、どうやら彼女は非常に厄介な事情を抱えているようで――？感想、評価はお気軽にどうぞ。不定期更新ですが、最低でも月に二回は更新します。

第1話（前書き）

自身初めての小説です。

至らない所は多々あると思いますが、どうか温かい目で見守っていただけると幸いです。

アドバイス・誤字脱字などの指摘をしていただけたら、大変嬉しいです。

第1話

？悪魔？。

それは空想の産物ではない。後に？終末の日？と呼ばれることになった日から、突然この世に姿を現し、

それまで生態圏の頂点を極めていた人類を、一方的に喰らい始めたモノ。

それは人間と同等、あるいはそれ以上の頭脳を持ち、また彼らの肉体にはどんな兵器もほとんど通用せず、また一部の強力な悪魔に遭遇してしまった場合、人間は逃げることも隠れることも出来ず、ただ人間に出来ることがあるとすれば、彼らに「運良く」見逃されるコトを祈るだけ。

？終末の日？からおよそ数百年の長い年月が過ぎ、なおも世界中で暴虐の限りを尽くしていた彼らに対抗しうるチカラが一つ、発見される。

それは凄まじい犠牲を払って捕獲することに成功した？悪魔？を、科学的に解析した末に生まれた、自らの魂を対価として、？悪魔？のチカラを部分的に獲得する、真正銘禁断のチカラであり、そのチカラは振るえば振るうほど、その使い手の魂を徐々に汚染していき、最後にはその使い手を？人間？から？悪魔？へと変えてしまう。そんなチカラを振るい、？悪魔？と日々戦う者達。

人々はそんな彼らを、敬意と畏怖を持って、？被魔士？と呼ぶ――。

「こんな遅くに、一人で晩酌とは寂しいなア。ちょっと俺達の話し相手にでもなってもらおうか」

深夜の酒場で、二人の酔った男達が、カウンター席に一人で座り、

食事をしていた、十代後半くらいの少女に絡んでいた。

少女は黒いローブに身を包んだ、取り立てて特徴の無い容姿であったが、その表情はまるで人形を思わせるように冷たく凍りついており、それが男達の目に留まったようであった。

「結構です」

男達の方に振り返ることもせず、素っ気なく返した少女の態度は、酔って気が大きくなっていた男達の癪に触るのには十分だった。

「その態度は何だア？俺達は？被魔士？だぞ！」

片方の男は大声で怒鳴ると、いきなり少女の前に置かれていた料理皿を払い除け、少女の胸倉を掴んだ。

パリン、と少女の足元で皿が割れ、無表情は崩さなかったものの、僅かに息を飲んだ少女に向かって、その男はさらに怒鳴った。

「嬢ちゃんが今日生きていられるのも、俺達？被魔士？のおかげだぞ？そんなコトも分からないっつーんなら、俺様が直々に教えてやるつかア？」

少女は顔を背けながら、男の暴言を聞き流していたが、他の席で一部始終を見ていた客の一言が、さらに男の逆鱗に触れてしまった。

「…何が？被魔士？だ。これじゃあ、どっちが悪魔かわかりやしねえな」

「今喋ったヤツ、出てこいッ！」

男は一際大きな声を上げ、その声のした方向を振り返って剣を構えたが、運よく店の全員がだんまりを決め込んだため、男は声の主の特定をあっさりと諦め、捨て台詞を残し、踵を返そうとした。

「ヘッ、命拾いしたな」

「そうだな。もしも剣を抜いていたら、俺が相手をしていたところだ」

すると、一人テーブル席に座り、そこで黙々と食事をしていた少年が、いつの間にか男の背後に立ち、男の背中に刀の柄を押し当てていた。

それを見たもう一人の男は慌てて立ち上がろうとしたが、少年の放つ圧倒的な迫力に気圧され、その場で一步も動くことが出来ない。

「酔った上でのトラブルなら多少は大目に見ていたが、暴力に訴えるなら別だ」

「お、おい、俺を誰だと思ってやがるんだ？俺は——」

「知らないな。まさか？被魔士？だとも言いたいのか？」

その言葉を聞いた男が、首だけで少年の方を振り向くと、少年が羽織っている黒いコートの内側から、紺色の生地銀の刺繍が施された、通常のそれよりもかなりタイトなデザインの聖服が姿を覗かせていた。

「あの服は……！？教会？が任命した、正式な？被魔士？にしか支給されない特別な聖服だ！あの兄ちゃん、真正銘本物の？被魔士？だぜ！」

「な、なにイ……」

その少年の服装を見た客が発した驚きの声を聞き、酔いが一瞬で吹き飛んだ男達に向かって、その少年は最終勧告を告げた。

「？被魔士？の名を騙ったことは見逃してやるから、勘定だけ置い

て今すぐ帰れ」

「被魔士？の名を騙る者ほど、その強さを過信、あるいは妄信しているものであり、その男達にとってチカラの象徴であったのである？被魔士？と対峙しているという現実には、男達の戦意をあっさり挫いてしまった。

男達はカウンターの上に代金を叩き付けると、そこから逃げるようにして立ち去った。

「……騒がせたな。では、俺も失礼させてもらう」

中々静まらないざわめきの中、あっという間に残りの食事を食べ終えた少年は、ようやくやって来た酒場のマスターに代金を手渡すと、酒場を後にした。

「やるなー、あの兄ちゃん。さすが本物の被魔士？だな」

「けどよ、今はあーでも、どうせあの兄ちゃんもそのうち？悪魔？になっちまうんだろ？わざわざ関わることはねーよ」

「だな」

カウンター席で一部始終を見ていた少女は、先程の少年について話す、他の客同士の話に耳を傾けながら、その少年が出て行った方向を、闇よりも黒く深い瞳で、静かに、静かに見ていた。

第2話（前書き）

どうも。二話目です。戦闘シーンはダッシュを多用して臨場感を高めてみました。

第2話

（この町も随分治安が悪くなったな……。まあいい、早く教会に帰らなければ……）

夜道を急ぐ、刀を帯びた被魔士の少年——クロウ・ヒュウガ。

その少年——クロウ——が帯びている刀——？神無月？——は、勿論普通の刀ではない。

それは、いわゆる？妖刀？と呼ばれる類のモノであり、捕えた悪魔の一部を刀身に埋め込み、それに自らの魂を捧げること、本来あらゆる攻撃を無効化する悪魔への攻撃を可能にする、いわば毒を以って毒を制するという発想で作られた刀である。

そのため、その刀を使えば使うほどクロウの魂は汚染・浸食されていき、またこの刀で斬られた人間の魂も汚染されてしまうため、実際人間相手には使えない、どこか決して使ってはいけない禁断の力であるため、先程の脅しはただのフェイクに過ぎなかった。

「来た来た、あのガキ、俺様を馬鹿にしゃがって……」

「それは不味いですよ、旦那……。もしもバレたらどうなるか……」
そのフェイクに引つかかった当の本人である二人の男達は、その少年の百メートル程先の路地裏で、先程自分達に恥をかかせたクロウを襲うため、息を潜めていた。特に、先程暴れた方の男は既に剣を抜き、早くも臨戦態勢に入っていた。

「バカ野郎、被魔士が道端で死んでたって、悪魔の仕業だと思われただけだろうが。誰にもバレねーよ」

「確かに、僕達から見ても被魔士は結構鬱陶しいからね。実際なかなかバレないと思うよ」

「……！？」

背後から聞こえて来た思わぬ声に男達が振り向くと、赤と白のストライプで彩られた棺桶が、路地裏の奥に置かれていた。

その棺桶には様々な角度から無数のサーベルが刺さっており、まるで剣刺しマジックの実演が行われている最中のようなようであった。

「……こんな棺桶、さっきまで有ったか？」

「さ、さあ……」

男達が先程から自分達が身を隠していた路地裏に、自分達に気付かれないまま、こんな大きなモノを置けるはずがないため、男達の脳は混乱した。

「それではレディース、アンド……って、ジェントルメンだけか。まあいい、それでは、世紀のマジックショーをご覧あれ！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

突如鳴り響く、サイレンの音。このサイレンはこの町に張られた結界とリンクしており、それが鳴り出すということは、何らかの方法でそれが破られたことを意味していた。

「何だ！？」

先を急いでいた少年の前方から、何故か聞き覚えのある絶叫が聞こえてきた。

慌ててその声の方角に向かった少年の方に、先程一悶着あった男達の片方——カウンター席で一步も動けなくなっていた方——がフラフラと走って来た。

「た、助け——」

男が声をあげた瞬間、男の背中に投げナイフが突き刺さった。

男が道路に倒れ伏し、断末魔の叫びをあげるとともに、その身体が漆黒の炎で包まれていく。その炎が意味するコト——悪魔の襲来。

「全く、ナイフ投げはあまり得意じゃないから、絶対に動くなって言っただのにね」

両手で投げナイフを弄びながら、残酷そうな笑みを浮かべ、その黒い炎の中を悠然と歩いてくる、黒マントの青年。それは明らかに、この世の理からかけ離れた異様な雰囲気を漂わせている。

「悪魔か？」

クロウは黒コートを脱ぎ捨てながら、その青年に問い掛けた。

「まあね。僕はメフィストフィレス。奇術師だ」

そのメフィストフィレスと名乗った青年も、背後の黒い炎を吸収しながら、あつさりと答えた。

「私怨は無いが、今すぐ冥土へ還ってもらおう」

「ふふ、餌ごときが生意気だな。じゃあ、こつちも正当防衛させてもらおうかな」

悪魔と被魔士、それはウイルスとワクチンにも似た関係。

そんな二人の間で、早くも殺気と狂気が交差し始める。

あとは、何かキツカケを待つのみ。

そして二人が睨み合ってから数十秒後、男の身体が完全に燃え尽き、身体に刺さっていたナイフが道路に落ちた。

その硬質な音と同時に、メフィストは投げナイフを放った。

それを鞘で弾いたクロウは、そのまま一気に間合いを詰める。

そして抜刀——逆袈裟。

その一撃を、メフィストは背中に仕込んだサーベルを取り出し、難なく受け止めた。

続けてその刃を滑らせ、クロウの首筋へ——咄嗟にしゃがむ——

その頭上を通過する。

さらに追撃を加えようとしたメフィストの腹へ、左手でカウンタ——
——気味の肘打ちを入れた。

僅かに後退するメフィスト。肘に響く激痛「軽度の？汚染？。

その痛みを無理矢理に捻じ伏せ、右腕一本で頭部を狙った唐竹割り——後ろに跳ばれ、紙一重で躲される。

「へえ。少しは出来るみたいだね」

メフィストはそう言うのとバックステップで距離を取り、黒マントの中にビツシリと仕込まれている投げナイフに手を伸ばした。

一瞬生まれた余裕に、クロウは左肘を確認——僅かに黒く焦げているだけ——問題無し。両手で刀を握り直す。

次の瞬間、両手に大量のナイフを持ったメフィストの連射、連射、連射——。クロウは刀でなんとか凌ぎつつ、脇の狭い路地裏に飛び込んだ。そして奥に置かれた、赤と白のストライプの棺桶を発見した。

その棺桶には何故か無数のサーベルが突き刺さっており、中から黒い炎——おそらくもう一人の男の魂——が溢れ出している。

（チツ、このままでは——！？）

「フフ、狭い所は有利かな？」

メフィストはそう呟くと、路地裏を形成している建物の片方に身を隠しながら、腕を伸ばし、投げナイフの弾幕——ナイフが地面に落ちる金属音——安全を確認。

薄暗い路地裏を覗き込む——人影は無い。

ただし、先程剣刺しショーで用いた棺桶に刺していたサーベルが全て抜かれ、地面に転がっている——おそらくは。

（この中か……それは流石にお粗末だろう）

音も無く棺桶に近づく——真ん中にサーベルを突き立てる。

声は無い——手ごたえも無い——間髪入れずに刺しまくる——まるで針山に。

これでどこに隠れていても死んでいると確信した瞬間、誰かがいきなり背後に着地——思わず振り向く。

振り返った目に映るは？被魔士？の放つ鮮やかな閃光——袈裟斬

り。

メフィストは左肩から右腰にかけて真つ二つに両断され、切断面から大量の黒い炎を吹き出し、仰向けに倒れた。

仰向けになったメフィストの瞳に、刀を構えた被魔士が映った。

それほど難しい罫ではない。棺桶を踏み台に建物の二階部分によじ登り、下に意識が向いているところを斬っただけである。

「有ると見せかけて、実は無い。策士策に——いや、奇術師が奇術に引っかかってどうする」

「なるほど——棺桶送りは私というわけ——」

「黙れ」

クロウは何かを言おうとしていたメフィストの頭部に刃を突き刺し、完全に沈黙させると、頭部に仕込まれていた握り拳大の紅い塊——悪魔の根本を司るモノであり、クロウの持つ妖刀の要でもある謎の物質？核？を破壊した。

（少々勿体無いが——開発部もないしな）

？核？を破壊されたメフィストの身体は、そのまま先程の二人と同様に黒い炎に包まれると、すぐに燃え尽きて灰になった。

先程から鳴り響いていたサイレンも、原因が取り除かれ——結界の修復と結界内に侵入した悪魔の撃破——鳴り止んでおり、再び夜に静寂が訪れていた。

この——どこか虚しくて切ない——日常が、被魔士に課せられた日常。

ようやく緊張が解けたクロウは刀を収め、ゆつくりと路地裏を出た。

すると表の通りで黒ローブの少女が一人、表で殺された男の死体——厳密にはその灰——を見て、呆然と立ち尽くしていた。

「何か？」

「さっきのお礼をと思って、追って来たんですけど、これは——？」

「ああ。悪魔だ。もう倒したから心配は——」

その言葉を聞いた少女は突然足が崩れ、そのまま地面に倒れかけた。

ほんの数秒前まで？悪魔？と死闘を演じ、極限まで神経が研ぎ澄まされていたクロウは奇跡的な反応を見せ、倒れかけた少女を支えた。

（……気絶か。まあ無理もない——が、酒臭い……）

？被魔士？は一応聖職者であるため、クロウは今までアルコールの類は一切飲んだことが無かったが、そんなクロウでさえハッキリ分かる程、少女からは強いアルコール臭が漂っていた。

（……どうするんだ、コレ？）

？悪魔？に対しては瞬時に頭が回るが、こういう場面では中々結論が出せないのがクロウという少年の性だった。

第3話（前書き）

ようやく話が動き始めました。

色々描写不足だと思いますが、そういうところはどんどんアドバイスをお願いします。文体も色々試行錯誤中なので毎回ちょっとずつ変えてます。

第3話

結局、年頃の女の子をその辺に放り出しておく訳にはいかないという結論に至ったクロウはその不良（？）少女を背負うと、教会本部にやって来た。

その入り口で、おそらく悪魔の迎撃に向かっていた？被魔士？の一人——赤みが掛かった髪と瞳を持つ隻眼の少年——ヒバリ・キサラギとバツタリ会ってしまった。

「ああ、クロちゃんだったのか。悪魔を始末したのは」

僅かに笑みを浮かべながら、右目に装着した眼帯を弄るヒバリ。そこは流石の状況判断能力で、一見同僚が犯罪的な行為に及んでいる現場をスルー。

「ああ。偶然遭遇して幸運だった」

「犠牲者が何人くらい出たか分かる？」

「一応二人は確認したが」

「じゃあその二人の住民票にチェックしといてね」

？悪魔？に喰われた死体は、後に何も残さない。

そのため、犠牲者の確認作業は最も困難な後作業の一つであり、その負担軽減として教会が住民票を預かり、？被魔士？などにチェックさせる仕事を請け負っている町は多い。

「分かった」

クロウは背中の少女をさっさと教会まで運ばうと門を開けると、後ろからヒバリが声を掛けてきた。

「あ、そうそう——どうして酔い潰れた悪魔っ娘を連れてるの？」

思わず後ろを振り向くと、ヒバリの右目の眼帯が外されていた。

そして彼の二度と光を見られぬ右目に移植された、闇を見るための紅い目——？悪魔の目？——が光っていた。

そして両手には、ヒバリの持つ対悪魔用武器——？断罪の釘？——が握られていた。

その外見は紅い色の五寸釘で、悪魔の？核？を削り出したものであり、その鋭さはクロウの持つ妖刀？神無月？

にも匹敵する。

「——って、何を言ってるんだ？これはただの酔っ払——」

「いやいや、僕の右目は絶対だ。どうしてサイレンが鳴らないのかは分からないけど」

沈黙——どちらも全く状況が掴めないまま、ゆっくりと時間だけが過ぎていく。

「ってかその娘、サイレンが鳴る前から会ってた？」

いつの間にか寝息を立てている？悪魔っ娘？を見て、何かを閃いたヒバリ。

記憶——気絶する前の彼女の言葉から、彼女はさっき酒場で絡まっていた娘だと推測する。

「確かに、サイレンが鳴る前に一度会ったが、それがどうした？」

「いや、僕は侵入経路から追おうとして、最初にサイレンが鳴った場所に行ったんだけど、その連中が言うには悪魔は二人いたらしい。片方はあっという間に棺桶みたいなので逃げたらしいんだけど、

もう一人はまだ見つかっていないんだ。どうも町全体に張られている方の結界では探知できないみたいだ」

「その棺桶野郎はさつき始末したヤツだが……なんかザルだな、セキユリティが」

「まあまあ、そういう能力なんじゃないの……って、よく考えたらこの娘に聞けばいいじゃん。天才だな」

「お、おい、それはマズイんじゃないか？」

「大丈夫大丈夫。どう考えてもクロちゃんの立場の方がマズイから」

ヒバリは少女を揺さぶってみたが、少女はむにやむにや言うばかりで一向に起きる気配がなかった。

「ちよつと君——ダメだ、完全に酔い潰れてる」

その？悪魔？というにはあまりに邪気の無い様子に毒気を抜かれたのか、ヒバリは？断罪の釘？を仕舞い、溜息を吐いた。

「……どうする？」

「……しょうがないな。とりあえず起きるまで二人で見張ろう。住民票のチェックくらい明日でもいいよね？」

「そうだな」

「いやあ、本当に幸運だね。あの石頭がいたら、問答無用でクロちゃんごと始末されてるだろうしね。融通の利く僕しかなくて良かった良かった」

クロウはこの展開に微妙に安堵しつつ、明日の彼女次第で二人とも終わりがちな、と密かに自嘲した。

第4話（前書き）

少しずつキャラが増えてきました。

相変わらず淡白な文章ですが、その中でも内容が伝わるような文体を模索しています。なお、今回は短いので、次回の分量次第ではこちらに一部追加するかもしれません。ご了承ください。

第4話

「いいか、絶対にバレちゃダメだぜ」

そう言って教会へ続く門を開けて中に入ったヒバリに、クロウは？悪魔？の少女を背負ったまま、忍び足でついて行った。

教会の構造は、そのゴシック風な見た目とは裏腹に、警備の都合上地下13階まで続く巨大な地下施設が設けられており、特に一階以上のフロアで寝泊まりしているのはクロウら？被魔士？だけであるため、？悪魔？の対策本部というイメージとは裏腹に、地上から見た教会はひっそりと静まり返っている。

その中をグルッと半周——裏口に到達した二人。

そして合鍵を使ってドアを開け、一直線にクロウの部屋を目指していたところを、偶々廊下を歩いていたら、クロウもヒバリもよく知っている、教会の中でも数少ない同年代の金髪碧眼シスター——マリア・シェフェール——とばったり遭遇してしまった。

マリアの手には大量のお菓子袋——おそらく夜中にお腹を空かし、一階の食堂まで上がって来て、何か摘み食い出来そうな物でも探していたのだらうとクロウは推測した。

「……アンタ達、これは一体どういうコト？」

割とそういうことには鈍いと定評のある二人でもハッキリと分かるほど、みるみる怒りのボルテージが上がっていくマリア。その圧倒的な迫力にたじろぐ二人。

「な、何でもない。それよりマリアも、摘み食いは程々にしておいた方がいい」

「あ、ああ、また怒られても知らないぜ？」

二人は適当に誤魔化そうとしたが、マリアはクロウの背中では寝ている少女の顔をもう一度見ると、非難するような口ぶりで問いただしてきた。

「その子に何をするつもりだったの？」

「……」

二人の沈黙を受け、二人のすぐ近くまで歩み寄って来たマリア。そしてマリアは、現在進行形で少女を背負っているクロウから攻撃するのはマズいと判断したのか、前に立っていたヒバリに的を絞った。

「ハッキリ言いなさい」

「だから、言えないんだって——」

言い訳をしようとするヒバリの腹に、マリアの拳が突き刺さった。「言えないような内容か。そりゃー、言えないよねえ？」

その声と共に、回し蹴りが脇腹にヒット——床に転がるヒバリ。「いい加減なコイツはまだしも、クロウ君までそうだとは知らなかった」

地獄の底から死の宣告を告げるような、身も凍る恐怖。

「その子を渡しなさい」

「だ、ダメだ、それだけは——痛っ!？」

さらに蹴りを入れられ、沈黙するヒバリ。

駆け巡る思考——正直に話すリスク。マリアが人質に取られる可能性 e t c——リターン。自白を得やすくなる可能性 e t c + 現状の差し迫る危機を回避。

導き出された結論。

「そうだな……俺達もあまり何とも言えないというか、よく分かっていないんだが、もしも知りたいなら、ついてくればいい」妥協案の提示。

「クロちゃん!？」

思わぬ提案に、仰向けに倒れたまま声をあげるヒバリ。

「まあまあ、ここで大騒ぎになる方が厄介だからな。それに……怖い」神妙な面持ちのクロウ。

「……確かに、そうだね」同意するヒバリ。

「……なんか妙に二人ともシリラスじゃない？私何か間違ってた？」戸惑いを隠せないマリア。

「ああ、最初から最後まで全部間違ってたぜ？」
そしてわざわざ余計なことを言っヒバリに、マリアの四の字固め
が炸裂した。

第5話（前書き）

最近「りんたん！」に力を入れていましたが、ちゃんところらも更新します。はい。

第5話

「——というワケなんだ」クロウが少女を自分のベッドで寝かせている間に、一通りの説明を終えたヒバリ。

「ふうん、でも私には？悪魔？には見えないけどなー」割と呑気そうなことを言うマリア。

「一応この世界に現出する際に、ある程度姿を弄れる？悪魔？に見た目は関係ないんだけどね。大体、？悪魔？にヒト型が多いのここ数百年の傾向なだけらしいし。まあでも、雰囲気がそれっぽくないのは僕も同感。だけど僕の右目には、重度の？汚染？が見えるんだけどなあ。ほら、汚染度メーターの数値がどちらも100%を超えている」

そう言つて、銀色の懷中時計の形をした汚染度メーターを示すヒバリ。

「？汚染？とは、？悪魔？の力を行使した結果、その代償として使いた手の身体が蝕まれることであり、クロウの場合は？神無月？で何かを斬る度、ヒバリの場合は右目の？邪眼？に光を当てる度にその値——？汚染度？——が増加していく。

この？汚染度？は大きく分けて？初期値？・？現在値？の二つがある。

「？初期値？とは通常時の？汚染度？を示す数値であり、普通の人間は0%である。この数値は？悪魔？の力を行使する度に増えていくものであり、しかもこの数値を減少させる手段は現状見つからない。

一方？現在値？とは緊急時の？汚染度？を示す数値であり、？悪魔？の力を行使しなくとも、？悪魔？の攻撃を受けることによつて上昇してしまう。

このどちらかの数値——間違はなく？現在汚染度？の方ではあるが——が100%になった場合、普通の人間は黒い炎で焼かれ、耐

性のある？被魔士？は正気を失い、悪魔化してしまう。

つまり100%越えの人間なんて、絶対に有り得ないのだが――。

「で、？核？は？」肘の火傷に包帯を巻き終え、訊ねるクロウ。ヒバリの行動から、自ずと答えは分かっていたが。

「それが無いから、よく分からないんだよね」言葉を濁すヒバリ。

「なら、単純に始末する訳にもいかないな。この子がこんな状態でも正気を保つ何らかの術を身に付けているとすれば――俺達にとっても利用価値はあるだろう」

「でも、危なくない？」

二人はお前が^{マリア}いるから危ないんだ、というツツコミを全力で飲み込み、その内容を言葉裏に含ませながら答えた。

「フン、今この街に三人しかいない？被魔士？の内、二人が見張っているんだ。それこそ余程のことが無い限り大丈夫だ、な？」

「そうそう、よっぽどのが無いと、ね」

「そうだよね。ここはひょっとしたら外よりも安全かもしれないよね」

嫌味が全く通じないマリアに、内心ガクツとなる二人。

「というわけで二人とも、そろそろ起こしてもいいよね？もう4時だし」

「さすが修道女……朝が早いぜ」ウンザリした顔をするヒバリ。

「というよりも、俺達が夜更かしし過ぎただけだな。基本的に夜は徹夜だし」

「うん、まあ起こそう。あまり遅いと――世間的には早いとか、こちがしんどい」

基本的に昼過ぎから早朝まで動く二人にとって4時という時間は、そろそろ尋問が長引くと辛い時間帯である。そのためここは今すぐ起こすのが最善だと判断した二人は、互いに目配せすると、マリアに起こさせることに決めた。

「いいか、起きたらすぐに離れる」そう言いながら？神無月？の柄に手を掛けるクロウ。

「万が一人質に取られたら、君ごと刺していいよね？」さらっと酷いことを言いながら、眼帯を外し、両手に？断罪の釘？を持つヒバリ。

「……まあ一応、覚悟はしておくわ」流石に顔を引き締めるマリア。
「じゃあ……起こすわよ」

マリアはそう言つと、少女を揺さぶつて起こし始めた。武器を構えた二人の間にも、緊張が走る。

しばらく揺さぶると、その少女は言葉にならない呻き声を上げ、モゾモゾと動き始めた。

「よし、もう離れてろ」

クロウは慌ててドアの前まで避難したマリアの前に、盾として立った。

「さて——、鬼が出るか、蛇が出るか」

一方ヒバリは、二人の立っている側からベットを挟んで反対側にある窓の前に立ち、少女の逃走ルートを塞いだ。

「ああ……頭痛い……」

少女はそう言つと、むくりと起き上がり、ジロツとクロウの方を向くと、顔を押さえてベッドに腰掛けた。

「ここはどこ……？まさか、お持ち帰りされた系？」

ふざけたことを言い出す少女。緊迫した部屋の空気が僅かに緩む。
「確かに、微妙に否定できないのがアレだね」

何故か乗っかるヒバリ。こういういい加減なところは、誰にも真似できない。

「……ふざけるな。君、俺のことが分かるか？」

クロウはヒバリを睨み付けると、少女に問い質した。

「ああ——、確か酒場で絡まれているところを助けてくれた人だよね？確かお礼を言いに行ったトコまでは覚えてるけど……でも流石にこの展開はダメでしょ」

「……随分口調が違うな？」

「お酒が入ると何故か敬語になっちゃうタイプで——まあ嫌なら戻

しますけど」

「別にそんなことはどうでもいい。で、君は何者だ？」

「……へえ、分かる人には分かるんだ？まあ、下手に隠して印象を悪くするのもなんだから正直に言うけど、私の名前はリリス。半分？悪魔？を引いてるの。本当かどうかは知らないけど」

思わず顔を見合わせるクロウとヒバリ。とりあえず続けろ、という感じのニュアンスでヒバリは首を縦に振った。

「何故、それを？」

「……お母さんの遺言。まあお母さんは人間だったらしいから、多分私の父親が？悪魔？なんでしょうね」

「じゃあ、何故君のお母さんは？」

「病気、かな。実はそういう噂は私も結構聞いてて——勿論お母さんの話を聞くまで信じられなかったけど——それで私とお兄ちゃんを育てるために、誰の力も借りずに寝る間も惜しんで働いて、身体を壊して、それで……」

リリスはその過去を思い出して悲しくなったのか、少し涙ぐんだ。
「……辛い話をさせてしまつてすまない。しかし、そんな話は聞いたことがないが？」

「私は、この人間じゃないんです。？悪魔？と戦う？被魔士？の方に願いを叶えてもらうために、この町に来ました」そろそろ本題に入るのか、言葉を改めたリリス。

「……で、君は今、その？被魔士？と話しているわけだが、その願いつてのは何だ？」

「……私の父を探して下さい。お願いします」

「探してどうする？返答次第では、今すぐここで死んでもらう」

「私が父を……殺します」

「でも素人一人じゃ難しいぜ？僕達のように、それなりの覚悟と適性がないと——」

「私にも、当てがあります。貴方が持っている刀を貸して下さい」

「それは無理だ。これは俺しか——いや俺でも長時間は使えない、

禁断の道具だ」

「大丈夫です。私に出来ることは、これくらいですから」

「しかし――」

「まあまあ、とりあえず何をするのか見せてもらおうぜ？見たところ戦い慣れてる感じじゃないし、もしもヤバそうなら僕が何とかするからさ」

「まあ、お前がそう言うなら……」

クロウはリリスの動きに警戒しつつ、ゆっくりと？神無月？を手渡した。

少女はヒバリの監視の中、？神無月？の柄に手を掛けると、それを少しだけ抜き、刀身に指を添わせて軽く斬った。

「おいっ！？なんてことする……ん！？」

クロウは思わず叫んだが、目の前で起こった異常事態に言葉を詰まらせた。

教会による細かな調整によって、例外的に耐性のあるクロウやヒバリ以外は？汚染？し、黒く焦げ付くはずの傷口から、赤い血が浮かび上がっていた。

「これは……？」

？悪魔？とも普通の人間とも異なる反応に、言葉が出ない三人。

第6話（前書き）

ようやく第一部（仮）のメインキャラは全員出揃いました。しかし、筆が遅い……。

第6話

「まあ、そういう訳で、多分こういう類のモノなら何でも使えると思います」

リリスは僅かに血の付いた刃先をロープで拭くと、ぱちんと刃を鞘に戻し、クロウに？神無月？を返した。

「……なるほど、つまり戦闘時のリスクが無いのか」

クロウは？神無月？を受け取ると、再び腰のベルトに差し戻し、感心したような口ぶりで呟いた。

「これでようやく、僕達もお払い箱ってことだね」

ヒバリの相変わらずクレイジーな発言を聞き、マリアは黙ったままジト目で返した。その視線を受けて、ヒバリは急に深刻な顔を浮かべると、部屋をグルグルと歩き回った。

「いやー、まあ真面目に言くと、結構ヤバイよね。色んな意味で」「ああ。どっちにしても不味いが——」

クロウは、壁に背を付けると、僅かに溜め息を吐いた。

「どういうコト？」

？悪魔？と第一線で戦っている者にしか分からない圧倒的な脅威。それがイマイチ分からないマリアは、二人に向かって首を傾げた。

「マリアちゃん。どうしてこの町が、たった5人——いや今は3人か、でなんとか守れているのかって分かる？」

ヒバリの問いに、マリアは考えが纏まらないまま答え、そして偶然なのか必然なのか、見事正解を導き出した。

「……？悪魔？の方が圧倒的に数が少ないから——ってそうか。その差が詰まるってことか」

ヒバリは頷いて肯定すると、ベルトに腰掛けたリリスに視線を遣った。

「うん——。どうやったのかは知らないけど、そういう方法が確立されたとして、さらにそういう類の人間が？悪魔？側に付くような

事態になると、それこそ？終末の日？直後以上の生物災害になるからね。そのへん、リリーちゃんはどうかの？」

ヒバリからの問い掛けに、リリスは慎重に言葉を選びながら返した。先程からテンションの上がり下がりの激しいヒバリの様を見ていつ自分に矛先が来るのか警戒しているのかもしれないが、同じ？被魔士？である自分やヒバリの天敵であるマリアがいる以上、その心配は杞憂に過ぎないのだが。

「残念——というのも変な言い方ですけど、私の兄を除けば、私と同じような人達は今まで見たことはありません」

それを聞き、さらにもう一つ質問するヒバリ。

「じゃあ、君のお兄さんは今どこなの？」

当然の疑問。確かにそんな父親への憎しみは、リリス以上に母親と接する時間が長かったであろう兄の方が強い可能性も高い。

「お母さんが死んだ後すぐ、父を捜しに行くと言って出て行ってしまつて……半年くらい前のことなんですけど」

当然——あるいは必然の結果か。どちらにも転び得る不確定要素が最低でももう一人、世に解き放たれていた。クロウはそれを聞き、若干嫌な感じがした。

「その君のお兄さんの存在はちょっと気になるけど、まあそういう人はまだそんなにいないのかもね。だけど、僕達よりも断然ハイスベックだからなあ。敵に回すと厄介だ」

敗北条件を

「だったら仕方ない、今すぐあちこち探し回って片っ端から叩いてみるか？今すぐ動けば、まだこちらが戦力的には優勢かもしれないしな」

事実上の妥協案——もとい強硬案を提示するクロウ。

「相変わらず、クロちゃんは頭が固いな。強硬策で勝てるくらいならどっかの真面目な馬鹿がとづくにやってるだろうし、それにリリーちゃんみたいな人達が向こうに付くとは限らないだろ？」

「……なるほど。逆にこちら側に引き込むってことか。あまり気は

進まないが」

「まー、別に僕もそんなにやる気は無いけどね。ぶっちゃけ向こうに付こうとそれはそれで問題ないしね」

「……何でそんなにやる気がないわけ？」

「いやー、僕は遠征行ってる二人みたいにマゾでも、師匠みたいにサドでもないからなあ。昼夜逆転はするわ、殉職しても二階級特進するどころかいきなり銃弾撃ち込まれるわだから、なーんかイマイチやる気出ないんだよなあ」

この圧倒的な、やる気の無さ。もうそれにはとつくに慣れたクロウは、いちいち反応しない。

「それは当たり前だろ」

戦闘の長期化や損傷などで汚染値が100%を超え、？悪魔？化した？被魔士？は、？悪魔？化した時点で死亡扱いとなり、一切の人権を失って攻撃対象となる。ある意味仕方ないと言えば仕方ないが、これが嫌で、素質があるにも関わらず？被魔士？になる道を断念する者も多い。

「でもさー、なんかおかしくない？割りに合わないっていうかなんていうか、そう、やってる見返りが何もないんだよね。別に他の役職みたいは何年かやってれば出世するってわけでもないし」

「だから、名誉職の一種だろうが」

「……よくそれで、今までやってきたわね」

自分達の事実上の戦力——その三分の一の無気力ぶりをまざまざと見せられて、若干血の気が引いているマリア。

「偉いでしょ？」悪戯っ子のような口ぶり。

「……偉い、偉い」何となく意図を掴んだマリア。

「いやー、それほどでも」思った通りの反応、という感じの笑み。むしろコイツがまともに続けている理由の一つはマリアがいるからじゃないのかと密かに踏んでいるクロウは、二人の会話を断ち切り、話の流れを本題に戻した。

「まあ夫婦漫才はいいとして、あとはさっきも言った師匠を説得し

ないとな」

ある意味ではこちらにも気が重い、というのが率直な感想。大体こんな肉体系の職業であんな年齢——本人は何も言わないがおそらく40前後——まで現役なのが、本人の驚異的な実力を端的に表している。そんな怪物を説得するとか考えるだけでも思わず冷や汗が出る。「そうだね。ってか、基本見たぐらいで分かるのなんて僕と師匠だけだし、師匠だけ説得してしまえば、しばらくはどうにでもなるんだよね。しかし、あの化け物をどうするか……やっぱり力づく、それとも不意打ちしかないかな」

「……私が行こうか？流石に私から話せば聞いてもらえるだろうし」「まあ、それが一番現実的だな」

話がようやく纏まりかけたところで、

「おい、馬鹿弟子二人。俺の目を盗んで乱交パーティとはいいい度胸じゃねえか」

ゆつたりとした茶色いコートに身を包んだ、まるで鮮血で染められたような赤い髪を長く伸ばした大男が、いきなりドアを開けて入ってきた。

「ヤ、ヤバい、皆逃げ——」

窓を開けて一番に逃げ出そうとするヒバリに向かって、大男が右太腿のホルスターから抜いたダブルアクションタイプの大口径回転式拳銃が火を噴いた。

おそらくは硬質のゴム弾であろう銃弾を背中に受け、窓の向こうに転がって行くヒバリ。

それは一旦放っておき、クロウはおそらく次の目標であろうリリスの前に立ち、？神無月？の柄に手を掛けた。

それを受け、クロウ——あるいは背後のリリスに向けてピタリと回転式拳銃を合わせる大男。

「初動が遅い」

「……流石に早撃ちですね、師匠」

「ほつ、そういう奴を見るのは二人目だな」

「……心当たりはありますけどね」
「話してみろ」

第7話（前書き）

相変わらず執筆速度が遅くていいけませんね……もう少し早く書けるように努力します。

第7話

「——というわけです、はい」

背中に大口径の硬質ゴム弾を受け、外でひっくり返っているヒバリを、リリスとマリアが介抱している間に、クロウは自分とクロウの師匠である、現在この教会に滞在している最後の？拔魔士？——ビリー・コルセア司教に、先程リリスから聞いた話を適当に？い摘んで話した。

「なるほど。俺がさっき交戦したのは、そういう類の奴だったのか」
師匠の言った言葉の中にある、気になるワード——？交戦？。さつき侵入してきた？悪魔？は、自分が倒したはずだが……。そこまで考えたところで、クロウはさつきヒバリからもう一体侵入しているという話を聞いたことを思い出した。しかし、その師匠と交戦したという？悪魔？が、リリスと同じ類の人間——？

「交戦、ですか。やはり？悪魔？側に取り込まれている人間も、一定数いるということでしょうか？」

「どうだろうな。例えばその嬢ちゃんも、別にその怒り、あるいは恨みの矛先が人間に向いても不思議はないだろう。それにだからといって、？悪魔？に尻尾を振るつもりなんかねエって考えることも有り得るだろう。というより、俺ならそうするぞ？」

そう言いながら、右手に持った大口径回転式拳銃のシリンダーを振り出し、ベルトに取り付けてあるポーチの中から弾丸を一つ取り出し、今撃った分を装填したビリー・コルセア司教「師匠に、クロウは呆れながら返した。

「……師匠の考え方は知りませんが、そういった集団が第3勢力となる可能性がある、ということですか？」

「さあな。そこまでは知らんが、俺と戦った奴はそんな感じだった」
そして師匠は溜め息を吐きながら、装填し終えた大口径回転式拳銃を右太腿のホルスターに納めた。そのいつもと異なる様子を見て、

クロウは僅かな違和感を抱いた。

「で、その相手は倒したんですか？」

追及。師匠の性格と能力上、？悪魔？が師匠から逃げ切れることはほばないため、師匠が『戦った』などというあいまいな表現を使うことなどないはずだが。

「いや、逃げられた。しかし言い訳するようでアレだが、退魔武器を複数持たれていると厄介だな。最後の最後で身代わりみたいな力を使いやがった」

クロウの予想通り、？悪魔？、あるいはその力を乱用する人間を仕留めきれていなかった師匠。この町最強の使い手が、一对一の状況ですら倒しきれない程の敵。現時点のクロウやヒバリでは、間違はなく敵わないことが容易に推測される。

「……それは完全に言い訳だと思えますけど、確かに複数の退魔武器は厄介ですね。単純に武器としては扱いづらいタイプのものも使えますし」

「ああ、それは俺も思った。それこそ今言った、身代わり出来る程度の退魔武器なんざ、単体だとただのゴミだしな」

退魔武器の組み合わせ——単独戦闘になること恐れて、サポート系の力を持つ退魔武器の使い手がほとんどいない？被魔士？にとつて、想像もできない未知の領域。

「で、どうします？」

そう尋ねたクロウに、師匠は溜息を吐いて返した。

「俺に一々聞かずに、ちったあ自分で考えたらどうなんだ？」

「そうですね……、まあ昔から、敵の敵は味方だと言いますが……」
「お前は相変わらず理屈っぽいな。だからそんなナマクラ刀を使っているだけなのに、二つ使っているヒバリの奴と？汚染？の進行速度が変わらないんだよ」

「……それはただの噂でしょう？」

「まあ、別に俺はどうでもいいけどな。お前がイカレちまつたらイカレちまつたで、遠慮無く脳天に銃弾を叩き込んでやるから」

「むしろこちらが悪魔だといわれるくらい、アンタを痛めつけてやりたい気分ですけどね……」

ようやく背中のだメージから立ち直ったヒバリが、窓枠をフラフラと乗り越えて入って来た。それを慌てて追う、マリアとリリスの二人。

「おう、こんなときにお前は一体何をやってたんだ？」

悪びれもせずに、真顔で返す師匠。言い返す言葉も浮かばないのか、歯ぎしりをするヒバリ。

「人の背中めがけていきなり50口径を撃ってきたのは誰なんですかね……」

「知らんな。気のせいじゃないのか？」

やつのことと言葉を返したヒバリを、バツサリと斬り捨てる師匠。ヒバリには気の毒だが、つつい口元が緩んでしまう他の三人。「クツ、クロちゃ——」

クロウに助けを求めようとするヒバリに、クロウは追撃の一言を放った。

「今はそんなことに構っている場合じゃない」

その言葉を受けたヒバリは、ベッドに力なく座った。

「……この二人こそ、本物の悪魔じゃない？」

それを聞いたマリアとリリスはとうとう堪えられなくなったのか、その場で吹き出した。

その和んだ空気に満足したのか、師匠は部屋のドアをゆっくりと開けると、振り返ってリリスの方を向き、慇懃無礼な口調で言った。「まあそういう訳で、君もテキトーに頑張れたまえ。詳しい話はまた昼過ぎに。とりあえず、俺は寝る」

「分かりました。……えーと」

その男——クロウとヒバリの師匠の名前も知らないことに気付いたりリリスは、首を捻って他の3人から聞こうとした。それに気付いたヒバリは、口を尖らせてボヤいた。

「こんな人、おっさんで良いよ」

「これでもまだ若いつもりなんだがな？」

それを耳ざとく聞きつけた師匠が再び銃をホルスターから抜いてヒバリに向けると、ヒバリは舌打ちしながら両手を上げた。

「司教のビリー・コルセアだ。これでも不真面目なコイツらと違って正式な聖職者なので、コルセア司教とでも呼んでくれたまえ」

それだけ言うと、師匠は再び銃をホルスターに収納し、欠伸をしながらドアを開けて出て行った。

「やれやれ、まあこれでとりあえず一段落着いたね」

目の上のたんこぶである師匠が去り、ヒバリはようやく元の調子に戻った。

「確かに。結果的には一番の難関をすり抜けたわけだ」

「そういえばさっき言ってた師匠が逃がした相手って、リリーちゃんの兄だったりして」

相変わらずの、自重しない爆弾発言。その場が若干凍り付く。

「おい、流石に少しは遠慮したら——」

否定しようとしたクロウの言葉を、話の中心人物であるリリスが遮った。

「でも、案外そうかもしれない」

「……そうなのか？」

クロウがそう言ったリリスの方向を向くと、リリスはクロウが最初に酒場で会ったときに見せたような、凍り付いた表情を浮かべながら口を開いた。

「兄さんは、そういう人だから」

そしてそれだけ絞り出すように吐き出すと、リリスはじつと唇を噛み締めて俯いた。

それを見たクロウは、流石に反省したような顔をしているヒバリを横目に言った。

「あまりこんなことは言いたくないが、自分の兄と戦うのが嫌なら、被魔士？をを目指すのは止める。いざというとき、『相手が兄だか

「戦えません」という言い訳は通用しない」

あくまでプロ。その矜持とプライドから放たれる、ある意味ではヒバリのそれと比べ物にならない程の辛辣な言葉。

「ありがとう。でも、そう言ったとき兄さんを止められるのは、私しかないと思うから」

リリスはその一切を飲み込み、クロウに向かってキツパリと言い放った。

「……『止められる』か。まあ、そうかもしれないな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5991w/>

灰色の祓魔士

2011年10月9日03時10分発行